# 尾崎一雄全集

第八卷

筑摩書房

尾崎一雄全集第八巻
昭和五十八年四月二十日初版第一刷發行

著者　尾崎一雄
發行者　布川角左衞門
發行所　筑摩書房
東京都千代田區神田小川町二ノ八
郵便番號　一〇一―九一
電話　東京(291)七六五一(營業)
東京(294)六七一一(編集)
振替　東京　六―四一二三
印刷　株式會社精興社
製本　株式會社鈴木製本所
落丁・亂丁本はお取替致します

© K. OZAKI　Printed in Japan
0093—71208—4604

# 目

# 次

草除り……三
片づけごと……一八
孫談義……三三
小さい富士……四九
木登り……六六
村祭り……八三
松風……一〇七
乗物と老人……一二八
家の周り……一四三
寫眞のこと・その他……一五八
苔……一七六
閑な老人……一九〇

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

わが松も……二〇六
井戸がへをしなければ――……二二五
鎌倉の人……二三九
蜜蜂が降る……二五〇
居据つた蜜蜂……二六七
八幡坂のあたり……二七〇
だんだんと鳧がつく……二八二
大沼湖畔……三一二
早稲田界隈……三二五
誰でもさうなのか……三四二
墓地の變な木……三五七
能古島行……三七二

チャボ騒動……三九三
上高地行……四一〇
蜂と老人……四三五
ウロのある樹……四五一
迅く來いクリスマス……四六五
木刀・井戸・玉樟……四八四
日の沈む場所……五〇二
あとがき……五一九
後　記……五二三

# 尾崎一雄全集　第八巻

# 草除り

## 一

「今年、梅干作りをやつてゐたら大變だつたな」

「さうですよ。諦めてほんとに良かつた」

緒方とその細君とが、ヴェランダの椅子に掛けて、そんなことを云つてゐる。彼らの語調には元氣がない。兩方とも健康狀態が思はしくないのだ。緒方は血壓不安定、細君の方は可なりひどい低血壓だ。

「草除(くさと)りもしなけりや——」

「明日(あした)、ひろ子さんが來てくれます」

「さうか。——相當の草だから、二日がかりだね」

「二日來てくれるさうです」

「うん」

彼らの見てゐる前庭には、大小さまざまの木が植つてゐて、それが庭の半分を占め、あとは蘚(こけ)の生えるに任せてある。道路から玄關口まではほぼ裸地だが、そこにもゼニ苔が可なりはびこつてゐる。

「蘚の中の草は、彼女に除つて貰ふわけにいかないからね。われ〳〵で、ぼつぼつやるか」

「氣長にやるんですね」

會話の內容にも、しやべり方にも、威勢の良さといふものがない。兩方共それに氣がついて、相手を見、苦笑をうかべる。

もともと緒方は、植木の剪定だとか草除りだとかが嫌ひなのではない——といふより、好きな方だ。十年、いや六、七年前までは結構まめにさういふことをやつた。木の多い場所には當然藪蚊も多く、緒方はいつも蚊取り線香に守られながら、庭を這ひ廻つた。藥屋が呆れるほど蚊取り線香を仕入れた。緒方の家のあたりでは、蚊の居るのは夏ばかりではない。晩春に現はれ、秋半ばまで居る。

今は、その秋半ばなので、草ののび方は左ほどでもないが、不精してゐるので草だらけである。それを二人は、憮然と云つた恰好で眺めやる。

翌朝八時頃、約束通りひろ子がやつてきた。同じ部落の、三十をちよつと出た農家の妻女である。新芋の、きぬかつぎに適當な奴を持つてきてくれた。戰爭前には、十五夜の供へものにしたものだが——と、今はお廢しにした行事を緒方は憶ひ返したりする。

「初ものだわ。どうも有難う」



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「昨日、山（の畠）へ行つたら、できてたからね、ちつとばかし……」
「いつも何かしら——濟まないわね」
「ちつとばかしでね」
「二人きりだから、これで澤山」
ひろ子は直ぐ草除りを始める。やり方は手早い。緒方たちの三倍ぐらゐの速さでむしつていく。しかし、ざつである。田や畠の除草に慣れてゐるから速いのだが、田畑でのそれと、庭のとではやり方が違ふ。ひろ子が二日がかりで家の周りを片づけたあと、緒方は、三日も四日もかけて仕上げをすることもある。しないこともある。この頃は、どうでもいいや、といふ氣が先に立つて、ほつておくことが多い。だから草ののびは早いのだ。

## 二

ひろ子が來てくれるやうになつたのは、四年前か五年前か。初めはひどく亂暴なやり方だつた。蘚の中にあしらつてある何種類かの齒朶を引拔いたりした。蘚も一緒にひつぺがした。緒方が慌てて、蘚は除らないで、といふと、今度はゼニ苔まで大事にした。
「蘚の中の草は厄介だね」と彼女は當惑顏をする。
「これがアハゴケ。——コケといふけど、雜草だよ。こいつがツメクサ。この二つは除りいいけど、厄介なのはこつちのチドメグサでね」

「さう〳〵。これを根から除らうとすんと、コケまで除れちやつてね」
「蘚の中は、僕がやることにしよう。あんたには、ほかのところを引受けて貰はう」
「その方がいいね。蘚の中をやつてると、はかがいかなくつて」
それで分擔が決つた。
だが、油斷はできなかつた。ある年の晩秋、ひろ子は、カザグルマの蔓を根から拔き捨ててしまつた。緒方のところには、白と濃紫のテツセン、淡紫色のカザグルマがあつた。テツセンもカザグルマも共にキツネノボタン科の多年生蔓草だが、前者は六花片、後者は八花片でやや小型である。が、實によく似てゐる。世には、兩者を混同してゐる人もあるか知れない。
兩方とも落葉した蔓狀の莖は、枯れたふうに見える。實際にぽき〳〵と折れる。それでひろ子は引拔いてしまつたのだ。いち早く氣づいたので、二本のテツセンは助かつたが、危ふいところだつた。
その他二、三の失敗を重ねたのち、この頃では大體安心して任せられるやうになつた。
(失敗と云つても、もともと緒方が注意しておけば避けられたことで、彼女のせゐではない。とは云へ、ある時ごみ捨ての穴を掘らせたところ、埋まつてゐた繩文式土器の、可なり形の良いのを粉々にしてしまつたのは未だに緒方の心殘りになつてゐる。)

## 三

ひろ子がゼニ苔をこそぎ取つてゐる傍で、緒方は、蘚の中のチドメグサを丁寧に除つてゐる。チドメ

グサは、厚い蘚の根と同じ深さに地下莖をはびこらせ、その節から長い葉柄を蘚の上までのび上らせ、また同じ節から根を生やしてゐる。ただ引つぱつたのでは、蘚もろとも除れてしまふので、甚だ厄介だ。細身のナイフを根のあるあたりに差込み、それを浮き上らせてから、そつと地下莖を引つぱる。その地下莖は切れ易いので、丁寧にやらねばならない。

「先生は根が良いだね」とひろ子が云ふ。

「かうしないと、蘚が駄目になる」

「あたしら、とてもやつてられないね」

「あんたがこんなことしてたら、仕事にならない」

「さうだヨ。でも先生は、ほんとに根がいいだねエ。去年だかをとしだか、梅を干してられるとこ見たときにさう思つたヨ」

「梅の土用干しか。あれもね」と緒方は苦笑した。緒方の梅干製造に於けるねつつこさに辟易氣味だつた細君も、ここ數年來、彼の氣持を諒解したか同調してゐる。そんなことも彼は思ひながら、

「今年は身體の調子が良くないんで、梅干づくりは止めましたよ。あれは結構重勞働だ」

「今年は止めさしつたのかね」

「やめて良かつたと昨日も女房と話したんだが、かう不元氣ぢやあ、草除りもろくに出來ない。あんたにも十日にいつぺんでなく、一週間にいつぺん來て貰ひたいな」

「あいよウ。——この夏は變な陽氣だつたからね」

「陽氣のせゐばかりぢやない、齡のせゐもある。年々夏まけがひどくなる」

「……」

しやべりながらも、ひろ子の手は速くて、こそげ取られたゼニ苔は、芥取りの中でどん〳〵量を増してゆく。そいつらは、豫め掘つてある穴に埋められるのだ。

## 四

ひろ子が臨時手傳ひ人として出入りするやうになる前、時々來て貰つてゐたある獨り身の老人のことを緒方は憶ひ起してゐた。木村といふ、緒方と似た齡恰好の、他所者であつた。

彼がいつ頃、どこからこの土地へやつて來たのか緒方は知らない。東京の陋巷に三十年近く住み、細細ともの書き生活をつづけてゐた緒方が、敗戰の前年の秋——丁度今頃だが、病氣で現に住む西相模なる鄕里の小屋に引込んだとき、すでに木村は、この地の住人になつてゐたかも知れない。

「鋏、庖丁、剃刀磨ぎのご用は——」

さういふ聲が、たまに玄關でした。戰後間もない頃で、いろんなものが不足してゐた。何によらず古いものを修理して使つてゐた時代で、緒方のところでも勿論その例に洩れなかつた。當時、木村といふ名前は知らなかつたが、このよろづ修繕屋を重寶がり、鋸の目立てから、鍋や如露の穴ふさぎまで賴んだ。

戰後十年近く、木村はその商賣をつづけたのではなかつたか。病氣が囘復に向ふと、緒方は杖をついてその邊のぶら〳〵歩きを始めたが、ある時、近くの神社の石垣を背に、方々から集めた金物の修理を

やつてゐるこの男を見つけた。丁度、緒方が出した鋸の目立てをやつてゐるところだつた。

ギコ〳〵といふ餘り快適でない音を我慢しながら、暫く見てゐた。彼の作業ぶりは、極めて念入りだつた。

彼は緒方を上目で見て、

「釘を挽いたね」と無愛想に云つた。

「さう」

「古材木を挽くときは——」と、彼は、鋸を目のあたりで顏と直角に捧げ持ち、片目をつぶつて刃ならびを見通しながら、

「釘に氣をつけなけりやあ」と云つた。

「さうだね」

「仕上つたら持つてくから」

仕事の邪魔だから立ち去れ、といふ意味と解して、緒方は歩き出した。この鋸で釘を挽いたのは、中學生の長男である。病人の親爺をいたはるつもりで「ぼくやる」と鋸を持つた長男は、忽ちガリガリといふ音をさせ、「いけねェ」と云つた。緒方は、修繕屋が云つた通りのことを、長男に云つたのだつたが——。

やがていろんな物が出廻るやうになつて、彼の商賣は不振に陥つたのだらう、ある人に依頼して求めてゐた臨時の庭掃除人として緒方のところへやつてきたのが、この木村老人だつた。

金物修理人としての入念さにかねて感心してゐた緒方は、彼の除草ぶりの丁寧さにまた驚ろいた。殊

に、蘚の部分のやり方の綿密さは呆れるほどだつた。暇にまかせた丁寧さで、のちにひろ子から「根が良いだネ」と、ほめたのか冷かしたのか判らぬ云ひ方をされた緒方が、文句なく兜を脱いだほどのねつこさ、あるひはしつこさだつた。それは、ある種の不愉快さを感じさせさへした。だがともかく、木村が草除りをしたあとは、草の再生が、緒方のそれより確かに四、五日は遅れるやうであつた。

（ある高名な日本の作家に『剃刀』といふ名作がある。その短篇の主人公Y床屋のかみそり振りを、緒方は木村の手つきから直ぐ思ひ起こさされたものだ。――剃刀を使ふことにかけてはYは實に名人で、しかも癇がつよく、撫ぜて見て少しでもざらつけば毛を一本一本押し出すやうにして剃らねば氣がすまぬ、それでゐて膚をあらすやうなことは決してない、客はYにあたつて貰ふと一日延びが違ふと云ふ、そして十年間、客の顔に傷をつけたことがないといふのが彼の自慢だつた――そんな意味の一節があつて、緒方は、木村の草除りぶりが、そつくりそれに當てはまるやうな氣がした。）

この木村はまた、いろんなことをよく識つてゐた。緒方のうちにあるサカキが實はヒサカキであること、ツゲがイヌツゲであること、コトリトマラズと緒方が云つてゐたのはハクチャウゲの間違ひだつたこと、菊の莖を嚙んで途中からしをれさせるのがキクスヒカミキリであることなどを敎へてくれたのは、この木村老人だつた。

彼はまた、遠い昔、この地に住んだ人間たちの使つた石器、つまり石斧、石棒、石臼、石鏃のたぐひを見つけると、必ず取りまとめておいてくれた。

（のちにひろ子が來るやうになつてからは、彼女にそれらの實物を示し、氣をつけてくれるやう緒方は賴んだ。ただ、土器のことを云ひ忘れたのが失敗であつた。）



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com